

Nagasaki Association for Hibakushas' Medical Care

NASHIM



長崎・ヒバクシャ医療国際協力会通信

Contents

- カザフスタンからの医師へのヒバクシャ医療研修
- カザフスタンへの専門家派遣
- 韓国医師等受入研修
- 韓国への専門家派遣事業の実施
- ウクライナへの放射線測定器の寄贈
- 第25回ながさき国際協力・交流フェスティバルへの出展
- 新刊図書のご案内
- 出前講座の実施
- 永井隆平和記念・長崎賞の候補者募集



NASHIM 森崎会長への表敬訪問（カザフスタンからの受入研修）

カザフスタンからの医師への ヒバクシャ医療研修を実施しました

NASHIMでは、平成5年（1993年）からロシア、ウクライナ、ベラルーシなどチェルノブイリ原発事故周辺諸国や旧ソ連の核実験場があったカザフスタンで放射線被ばく者の治療にあたる医療従事者に対する指導、技術援助や医療情報提供を行うため、関係機関の協力を得て、独自に医師等の研修生を受け入れています。

令和元年（2019年）を最後に、新型コロナウイルス感染症の影響などもあり、受入研修を中断していましたが、今年度4年ぶりに受け入れを再開しました。

今回はカザフスタンから5名の医師を招き、ヒバクシャ医療研修を行いました。研修生は令和5年（2023年）7月17日から8月18日まで長崎に滞在し、長崎大学や長崎大学病院を中心とした専門研修において、日本の最新医療を学び、ヒバクシャ医療分野の関係者と交流を深めました。

また、研修期間中には長崎原爆資料館や追悼平和祈念館の見学など、長崎原爆の実相について学び、日赤長崎原爆病院、放射線影響研究所、長崎市原爆被爆者健康管理センター、恵の丘長崎原爆ホームなどへの視察訪問を通して、日本の原爆被爆者への援護ケアについても理解を深めました。



長崎県知事への表敬訪問

【研修生名簿】

- | | | |
|--------------------|----------|---|
| 1. ボルシンベコヴァ・サルタナット | (カザフスタン) | 国立がん研究センター 病理形態・細胞学部長
医師、病理学者 |
| 2. カイーロフ・ウリクベック | (カザフスタン) | ナザルバエフ大学 アスタナ・ラボラトリー生命科学センター
バイオインフォマティクス・システム生物学ラボ 主任 |
| 3. クアーニシェヴァ・アナルグル | (カザフスタン) | セメイ医科大学 医師、放射線科助手 |
| 4. アキルジャーノヴァ・グルバーヌ | (カザフスタン) | セメイ医科大学パヴロダル分校 産婦人科 助手
パヴロダル市立第一病院 産科部門・産婦人科 医師 |
| 5. パク・ラウラ | (カザフスタン) | セメイ医科大学 臨床腫瘍・核医学科 講座長
セメイ核医学・腫瘍センター 医師 |

【日程概要】

- 7/17 長崎へ到着
7/18～8/1 関係先訪問・見学、長崎大学での共通研修
8/2～17 長崎大学・長崎大学病院等での専門研修
8/18 帰国のため長崎出発



長崎原爆資料館



恵の丘長崎原爆ホーム

研修後の感想



Bolsynbekova Saltanat (ボルシンベーコヴァ・サルタナット)

国立がん研究センター 病理形態・細胞学部長 医師、病理学者

私は、7月18日から8月17日まで長崎大学原爆後障害医療研究所及び長崎大学病院にて行われたNASHIMプログラムに基づく研修を修了しました。この研修中、私は放射線の安全性の専門家の講義を聴講しました。また、病理学部を訪問し、複雑な症例や分子遺伝的変異のアーカイブを深く研究する機会を与えられました。

私にとって重要に思えたのは、私たちのグループと長崎県知事、長崎市長との会見でした。その会見の際、私たちの学習に対する心からの関心、両国の更なる協力への希望が見て取れました。

私にとって、このプログラムでの来日は初めてではありません。こうした機会のお陰で、私はカザフスタンに免疫組織化学及び分子遺伝学研究を導入した共和国で最初のひとりになりました。更に、私は日本の同僚と一緒に積極的に学術的研究を行っています。学術、教育、臨床における繋がりが確立されました。同時に数年前から、分子病理部門と電話会議や遠隔病理診断を継続的に行っています。日本の同僚の「セカンドオピニオン」は、患者に最終的な診断をつける際の重要な役割を担っています。

研修中のサポートと病理学アーカイブに取り組む機会をくださった中島正洋教授、ムサジャンワ・ジャンナ助教に特別な感謝の意を表します。

私を招聘し、研修を受けるまたとない機会をくださったNASHIMIに感謝の意を表します。



Kairov Ulykbek (カイーロフ・ウリクベック)

ナザルバエフ大学 アスタナ・ラボラトリー生命科学センター
バイオインフォマティクス・システム生物学ラボ 主任

私は、長崎大学原爆後障害医療研究所にて、2023年7月18日から8月17日までのNASHIMプログラムに基づく研修を修了しました。

研修期間中、私は核被ばく及び原爆の影響の排除促進とその研究に関連する多くのプログラムを実現するための広範なカリキュラムを習得しました。1950年代から現在まで、日本の学者や医師、同僚たちが継続的に蓄積した経験、学術用語で言う「追跡調査」《follow-up investigation》は、研究者の私にとって、全世界のための科学最大の成果です。日本の同僚が蓄積した経験のお陰で、放射線攻撃（ウラン、プルトニウムなど）の影響で発生する多くの後遺症やリスクを正しく評価できます。

私は研修の前半で、NASHIM会長、長崎大学学長、長崎大学病院長、長崎県知事、長崎市長、原爆被害者をサポートする医療機関の研究及び医療部門の多くの責任者、といった長崎県のトップリーダーに会い、保健科学システムの現状について話し合う機会を得ました。

放射線、環境放射線の人とその組織への影響調査における最新の研究結果と経験を共有して下さった原研のすべての教授と講師の先生方に、別途深い感謝の意を表します（博士と教授の皆さま、研究ありがとうございます：工藤崇先生、高村昇先生、横田賢一先生、サエンコ・ウラジミール先生、吉浦孝一郎先生、李桃生先生、横山須美先生、山下俊一先生、柴田義貞先生、宮崎泰司先生）。

また、研修後半には、環境放射線の影響を受けた患者に関するゲノムデータの分析問題について話し合う機会をくださった、ログノビッチ・タチアナ先生とサエンコ・ウラジミール先生に大きな感謝の意を表します。

ゲノムデータ解析と新型及び第三世代シーケンサープラットフォームによる、がん検体における差別的遺伝子発現、及び私たちのセンターで研究されている融合遺伝子の検出に関わるゲノムデータ解析の経験を共有していただきました。

NASHIM会長の森崎様、谷口さん、通訳の小川さん、イリナさんに、私たちの長崎市訪問時のお手配と付添いに対して特別に感謝の意を表します。



Kuanysheva Anargul (クアーニシェヴァ・アナルグル)

セメイ医科大学 医師、放射線科助手

私は、2023年7月18日から2023年8月17日まで、長崎大学原爆後障害医療研究所及び長崎大学病院で行われたNASHIMプログラムに基づく研修を修了しました。

私を招聘し、日本文化、医療及び科学に接する機会、長崎大学原研の第一線の先生方と交流する機会をいただけたことに対し、長崎・ヒバクシャ医療国際協力会に深い感謝の意を表します。

7月18日から最初の2週間の2023年8月1日まで、原研教授による放射線生物学と疫学、放射能の

安全性、人間の健康に対する放射線の影響（特に、放射線の成人、子どもの甲状腺への影響問題）などに関する興味深い講義が行われました。

山下俊一先生がお忙しい中、オンラインで《Radiation medical science from Nagasaki Fukushima》の講義をされました。

高村昇先生は、講義資料の中でチョルノービリと福島の教訓を取り上げました。福島市民に対する啓蒙と説明活動の経験は興味深いものでした。

研修最初の1週間に、NASHIMでは長崎県知事、長崎市長、長崎大学長、長崎大学病院長との会見を手配していました。

NASHIM研修生に対するこの高い敬意は、行政の各階層が、放射能被ばくが市民の健康や環境保護に及ぼす影響について関心を寄せていることを強く印象付けました。

原爆資料館、爆心地、平和祈念館、永井隆記念館見学は、忘れ得ぬ印象を残しました。

原爆病院では、診断、治療、予防プロセスの明確なシステム、また、最新の優れた設備（特に放射線科）、血液内科での臨床検査と治療に驚かされました。

被ばく者養護施設訪問では、驚くほど道徳的かつ精神的な雰囲気の中で、1945年の原爆で被害を受けた高齢者らのケアが行われており、これは日本人に対するより大きな尊敬の念を呼び起こすものでした。

患者の受け入れ、複雑な臨床症例の分析、科内の回診に参加する機会をくださった、講師、医学博士の堀江一郎先生を筆頭とする内分泌・代謝内科のチームに感謝いたします。

大学病院での研修中、科のドクターらが患者の一般回診、様々な内分泌疾患の患者の外来、エコー下での生検採取、患者への放射性ヨウ素治療を見せてくれました。更に内分泌・代謝内科のJournal Clubの会議にも参加しました。

PET-CT診断時の患者の分析に参加の機会をいただいたこと、PET-CT照射時の微妙な違いを辛抱強く説明してくださったことに対し、工藤崇先生に特別な感謝の意を表します。

研修期間中に問題が起こった時、サポートしてくださったA. アキルジャーノワ先生、J. ムサジャーノワ先生、V. サエンコ先生、T. ログノビッチ先生に多大な感謝を申し上げます。

また、私たちのグループに付添ってくださった引率者の谷口さん、通訳の小川さんとイリナさんに感謝したいと思います。



Akilzhanova Gulbanu (アキルジャーノヴァ・グルバーヌ)

セメイ医科大学パヴロダル分校 産婦人科 助手
パヴロダル市立第一病院 産科部門・産婦人科 医師

私は、2023年7月18日から8月17日まで長崎大学原爆後障害医療研究所及び長崎大学病院で行われた長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）の研修を修了しました。私たちは、研修で放射線医療や災害医療分野における第一人者らの講義を受けました。講義の内容は、甲状腺がんの問題、甲状腺がんの病因の分子のアスペクト、疫学の問題、分子及び放射線医学、核医学、広島市及び長崎市の原爆後の影響、また、チョルノービリと福島の原子力発電所の事故後の影響の研究に関するものでした。山下俊一先生、高村昇先生、光武範史先生、中島正洋先生、サエンコ・ウラジミール先生の興味深い講義、

社会的に重要かつ実践的研究については特記しなければなりません。この専門家たちは、大きな科学的研究を行うだけでなく、日本の各地域で、放射線の安全性の問題について市民に啓蒙をしています。

私は研修を通じて、第二次世界大戦時の日本の都市への原爆がもたらした医学的、心理的影響について、また、自然災害による福島原子力発電所での水素爆発について新たな知識を得ました。

私が重要に思えたのは、私たちのグループと長崎県知事や長崎市長、NASHIM会長、長崎大学長、長崎大学病院長との会見でした。彼ら一人一人のスピーチには、私たちの勉学への配慮、心からの関心、そして、私たちを介して、平和と軍縮を目指す両国への激励が感じられました。

研修の際、私は、長崎大学病院の三浦先生が率いる産婦人科医の原田先生、阿部先生、川下先生、西先生、その他の先生方と仕事をする機会を得ました。婦人科疾病を患う女性を治療するために日本の医師が適用する治療のプロトコールと方法、日本のクリニックでの妊娠・出産管理プログラムについても熟知することができました。助手として帝王切開、子宮摘出手術に立ち会いました。ダ・ヴィンチロボットを使った手術もいくつか見ることができました。経験を共有し、手術に参加させてくださった産婦人科チームの先生方に感謝いたします。研修の実習パートを手配してくださった三浦先生に深謝いたします。複雑な手術を執刀する際の医師たちの最高レベルの技術に言及したく思います。いただいた経験と知識は、我が国の医療現場で活用されます。

研修期間中、私たちは長崎の祈念館や慰霊碑を訪れ、原爆の地獄を生き延びた被爆者について知ることができました。戦争で破壊された街を復興しただけではなく、世界のすべての国とその指導者に対して、核兵器と戦争のない世界と生活を常にアピールする日本人の勤勉さ、忍耐、粘り強さに、深い尊敬の念が湧き起ります。原爆資料館の見学は、特に記憶に残りました。地球上のすべての人々に軍縮と平和の思想を届けたい、というガイドの話の切実さと願望に、私は心の底から衝撃を受けました。台風のために公式の原爆犠牲者慰霊平和祈念式典には参加できませんでしたが、2023年8月9日原爆の日に、平和公園で亡くなった方々を追悼し、二度と核爆弾が使われないよう祈ることができました。

研修への招聘、日本を訪れ長崎大学と原研の第一人者の講義を聴講するというまたとない機会を与えてくださったNASHIMに感謝いたします。



Pak Laura (パク・ラウラ)

セメイ医科大学 臨床腫瘍・核医学科 講座長
セメイ核医学・腫瘍センター 医師

まず、美しい長崎で1カ月のインターンシップという素晴らしい機会を与えてくださったNASHIM研修の主催者の皆さまに感謝の意を述べたいと思います。

この研修により、長崎と広島に落とされた原子爆弾や福島の原子力発電所で発生した水素爆発による被害についても深い知識と新たな情報を得ることができました。

長崎原爆死没者追悼平和祈念館と恵の丘長崎原爆ホームへの訪問では、忘れられない印象を受けました。原爆後に破壊された都市を復興させただけでなく、原爆の被害者とその子孫を検査・治療し、身体の健康と精神状態を見守り続けた日本人の不断努力と辛抱強さを心から尊敬いたします。

特に興味深かったのは、長崎大学原爆後障害医療研究所の著名な先生方による一連の講義でした。人

体に対する放射線の影響について、理論的な知識だけでなく、基礎知識についても学ぶことができました。特に、山下先生と高村先生による福島の事故の被害者に関する科学的研究と社会的支援についての講義は興味深かったです。私は、甲状腺がんの問題や遺伝子変異の存在と患者の診断や治療に対するその影響について取り組んでいるため、腫瘍のゲノム成分と身体との関係に関する深い知識を取り上げた中島先生と光武先生による講義は実に興味深いものでした。

また、長崎大学病院で2週間を過ごすという特別な機会にも恵まれました。総合診療医の皆さんの仕事ぶりにはとても感心しました。大坪先生のおかげで、腫瘍性疾患の外科治療を見学し、シンチグラフィを用いたセンチネルリンパ節の新しい決定方法を実際にやってみることができました。長崎大学病院のクリニックや手術室にはハイテク機器がありました。工藤先生とご一緒できたことで、腫瘍性疾患のPET-CT診断に伴ういくつかの問題を理解でき、またこの種の診断法はつい最近カザフスタンに導入されたばかりですので興味が高まりました。

今回の研修管理担当の谷口さんによる明確なスケジュールと十分に調整された業務のおかげで、長崎県内にある大学、市、県の管理部門など重要な場所をすべて訪問することができました！また、仲間たちとのコミュニケーションを手伝っていただいただけでなく、包括的なサポートも提供して下さった素晴らしい通訳者、小川さんとイリナさんにも深く感謝いたします。

この美しい国を訪問する特別な機会を与えてくださったNASHIMの会長に心からの感謝の気持ちを述べさせていただきます！日本は、その文化、素晴らしい人びと、美しい自然、そして信じられないほど親切で礼儀正しい態度で感銘を与えてくれました！ありがとうございました。



長崎原爆病院



原爆被爆者健康管理センター

カザフスタンへの専門家派遣事業



カザフスタンへの専門家派遣について

長崎大学原爆後障害医療研究所

所長 中島 正洋

令和5年(2023年)8月27日(日)から9月1日(金)の期間で、原爆後障害医療研究所アイソトープ診断治療学 工藤崇教授とともに、カザフスタン共和国セメイ州立セメイ医科大学(SMU)を訪問しました。私にとってはコロナ禍に入る前の2019年以来4年振りの訪問となります。福岡空港から仁川経由でAlmaty泊、翌日に国内線でSemey到着といういつもの空路です。Almatyでは旧友のGabit先生と原研センター林田教授ご指導の博士課程大学院生Yesbolが出迎えてくれ、Semey空港では教室の助教であるZhannaの家族や8月のNASHIM研修を修了し帰国したばかりのPak Laura先生が出迎えてくれました。今回の専門家派遣の主な目的はSMU創立70周年にあたり、その記念式典・祝賀会と「国際科学実践会議」the XVI International Scientific and Practical Conference "Ecology, Radiation, Health" dedicated to the 70th anniversary of the NonCommercial Joint-Stock Company "Semey Medical University"に招請され、参加・発表することです。SMUは1991年に「カザフスタン共和国」として独立宣言した若い国にあり、ソビエト連邦時代から70年の伝統ある医学部です。多数の卒業生を輩出して、カザフスタン医学会の指導的立場を担っています。NASHIM研修生や長崎大学医歯薬学総合研究科の大学院生としての交流実績は多数で、現在でも、原研には修士課程、博士課程合わせて11名の学生が在籍しています。今回の派遣事業にはSMU卒である、工藤教授ご指導のAiganym(博士課程2年)と私の教室からYerke(博士課程2年)とAdiya(修士課程2年)、また私の教室からBelarusianのKartya(博士課程1年)と黒濱助教の計5名が同行しました。

SMU創立70周年記念式典では大きなカンファレンスセンターに約2千人規模の参加者が集まり、多数の来賓、卒業生、教員が表彰を受けました。その中で長崎大学に感謝状が贈られたのは、NASHIM研修事業を含めた長年の学術交流が評価された結果だと感じます。今回の専門家派遣事業では、工藤教授はセメイ核医学・腫瘍センターの専門家を対象に「Positron Emission Tomography: FDG and beyond (PET: FDGとその次にくるもの)」というタイトルで講演をされました。カザフでも核医学に力点を置いて、多くの聴講者が集まり盛会となりました。私はシンポジウムのPlenary lectureにて「Pathologic biomaterials of Atomic bomb survivors in Nagasaki, Japan (長崎における原爆被爆者の病理学的生体試料について)」というタイトルで講演を行いました。放射線被曝の影響研究には不可欠な原爆被爆者の組織は病理診断の中で保存されてきました。その重要性や科学的価値につい

ては論をまちませんが、如何に被曝の影響を抽出して理解を深めていくか、今後も継続研究する必要があります。さらにOncology sessionでは「Molecular pathologic analysis for radiation-induced thyroid carcinogenesis with a rat model (ラットモデルを用いた放射線誘発甲状腺がん化過程の分子病理学的解析)」というタイトルで、放射線誘発甲状腺がんの動物モデルの網羅的分子発現解析の結果、被曝の指標となる分子を見出したことを報告しました。放射線発がん研究にはヒト組織と動物モデル両者での研究推進が必要不可欠です。

その他、今回、長大からの国際シンポジウム発表演題名を下記に列記します。カザフ出身の学生とNASHIM研修生Pak Laura先生は、我々のカザフ訪問のアレンジや通訳など、様々なサポートをしてくださいました。その合間をぬって、自分の発表も上手くこなしました。黒濱助教と4人の学生は、それぞれ、英語での発表を経験し、自身の成長につなげていくものと確信します。

黒濱助教：Oncology session「Clinicopathological features of podoplanin (D2-40) -positive thyroid cancer (Podoplanin(D2-40)陽性甲状腺がんの臨床病理学的特徴)」

Aiganym(D2)：口演「Radiation exposure characteristics among healthcare workers: before and after Japan's ordinance revision (検診業務従事者の放射線被曝の特徴：日本の法令改定前後の違い)」

Yerke(D2)：示説「Altered expression of autophagy and Wnt/ β -catenin molecules in different subtypes of thyroid cancer (甲状腺がん亜型別にみたオートファジーとWnt/ β -catenin関連分子発現の相違)」

Kartya(D1)：口演「Clinicopathological characterization of thyroid papillary carcinoma in autoimmune thyroiditis (自己免疫性甲状腺炎合併甲状腺乳頭癌の臨床病理学的特徴づけ)」

Adiya (M2)：示説「Molecular pathologic in situ analysis for histogenesis of thyroid cancer during anaplastic transformation (甲状腺がんの未分化転化に観られる組織構築変化に関連した分子病理のin situ解析)」

東カザフスタンに位置するSemey市は、19世紀から20世紀初頭に活躍したカザフを代表する哲学者・詩人のAbai Qunanbaiuly (アバイ・クナンバイウル)の出生地であり、カザフ文化の象徴を輩出した土地柄とも言えます。そのSemey市には旧ソ連時代1949年から1991年までセミパラチンスク核実験場があり、原爆開発を目的としたソ連邦による核実験の数は約500回を数えます。ソ連邦は放射線による周辺住民への健康被害や環境汚染を知っていたにもかかわらず、核実験を続けました。東西冷戦期の非人道的所業の一つです。現在でも実験場の土壌には放射線汚染は残っています。学会の開催期間にあたる8月29日はその核実験場閉鎖の記念日で、国連の「核実験に反対する国際デー」となっています。広島・長崎とSemey市は原爆放射線被害の歴史のみならず、核兵器廃絶の理想と平和希求の精神を共有しています。この特別な日には毎年Semey市主催の平和記念式典が開催されていて、我々も参列し、長崎を代表して献花とゲストスピーチをさせていただきました。長崎とSemeyとの交流の歴史の原点がここにあります。

今回のNASHIM専門家派遣事業はコロナ禍明け初となります。久しぶりに訪れたカザフで改めて感じたことは、現地の医師や学生のこの派遣事業への期待の大きさです。彼ら彼女らは、知識や技術の獲得に貪欲で、それに応えるためのこの事業を継続する価値ややり甲斐を感じました。今回も、多くの友人や知り合いが温かくもてなしてくれました。その中にはNASHIM研修生、長崎大学大学院修了

生のみならず、その家族も含まれます。Yerkeには実家に招待いただき、家族親戚一同と共にカザフの伝統料理を楽しむことができました。お祖父さんのドンブラと歌は心に沁み入りました。Zhanna助教のご両親には毎回歓迎会を催していただいていたいて、今回は、多忙の中SMU学長と核医学・腫瘍センターの室長も参加されました。彼らはZhannaの同級生です。Adiyaの従姉妹には帰路のAlmatyでの長いtransitの時間を利用して観光をアレンジしてもらい、ワイナリーでの試飲と買い物を楽しみました。その後はNASHIM研修生で元原研分子疫学講座客員教授Zhanara先生に食事をご馳走になりました。満腹で食べられずに申し訳なかったです。他にも多くの方々の親切に感謝します。カザフの国民性は、遊牧民という歴史の中での習慣や文化に根ざしていると感じます。家族や伝統生活を重んじ、プライドを持ち、客人を大切にす文化や習慣に触れ、大切にすべき何かを感じます。NASHIMとSemeyとの交流の歴史に感謝し、この事業が継続、発展することを望みます。



セメイ医科大学創立 70 周年記念式典で
スピーチを行う中島教授



セミパラチンスク核実験場閉鎖記念碑



国際科学実践会議での講義（工藤教授）

韓国医師等の受入研修事業

韓国に居住している被爆者への医療充実のため、被爆者の医療や援護に携わっている韓国の医師等を招いた受入研修を実施しています。

今回は、チェルノブイリ関連諸国・カザフスタンからの受入研修と同様に、4年ぶりの実施となりました。

第1回は6名の医師・看護師が参加し、令和5年（2023年）10月15日から19日まで、第2回は11名の医師・看護師・医療技師が参加し、令和6年（2024年）1月21日から25日までの日程で行われ、長崎大学や日赤長崎原爆病院で、ヒバクシャ医療に関する知識の取得や情報交換を行うとともに、被爆者からの講話を聞いたり、長崎原爆資料館などを訪れ、長崎原爆の実相について学びました。

なお、第2回研修では、長崎県が実施する在外被爆者支援事業の一環として招聘したブラジル人医師2名（エンヒ・リョウイチ・ナミセ先生、アリソン・タケオ・ツゲ先生）も合同で受講しました。

第1回 韓国医師等受入研修

（令和5年10月15日～19日）



姜 錫佑 (カン・ソグ)

ソウル赤十字病院 内科 科長

教授らが多くのことを私たちに伝えようと熱心に教えてくださり、原爆の被爆患者の現在の状況をさらによく理解して当時の被爆の過程と被害をよく知ることができました。今後、患者に接するときにも、もっと心的に共感して診療できると思います。

原爆の後障害について勉強ができるきっかけとなり、今回の研修は本当に良かったと思います。他の医療関係者にもこの研修を是非勧めたいです。



朱 明美 (チュ・ミョンミ)

ソウル赤十字病院 感染管理チーム 看護師長

NASHIMの研修に参加でき、とてもうれしく思います。福岡空港に降りてから、講義と視察など、すべてのスケジュールが順調に進むように気を配ってくださった関係機関の担当者や通訳の方々にも感謝いたします。

以前は知らなかった原爆被害者の方々の苦痛について知り、原爆被害者の方々の診療を行う機関で、その方々を理解して苦痛を分かち合うことができ、人を助ける者として、関心を常に持って注意深く観察する医療関係者になるよう努力します。

長崎都市の美しさときれいさに驚き、原爆の被害を受けた都市だとは思えませんでした。改めて、NASHIM会長と関係機関の皆様のご尽力に感謝し、有意義な研修だったと思います。



朴 賢美 (パク・ヒョンミ)

尚州赤十字病院 看護チーム 看護師

お招きいただき、誠にありがとうございました。現地でお会いした教授の皆様、関係者の方々、担当職員の方々、そして通訳者の方が親切に案内してくれ、研修期間中はリラックスして過ごすことができました。

原爆の治療について少しでも知ることができました。今後も研究と治療にご尽力いただきますようお願い申し上げます。ありがとうございました。



李 秀貞 (イ・スジョン)

統営赤十字病院 看護チーム 看護師

日本は初めて訪れる国なのですごく緊張して、初めての研修で失敗したらどうしようかと心配になりました。皆さん、初めてお会いする方々で、日本語も簡単な単語だけしか分からず心配な部分も多かったのですが、研修初日に頂いた自由時間で親睦を深める時間を持つことができ、長崎を散策して、長崎について少し知ることができました。

研修で、原爆被爆者の方々についてさらに詳しく知ることができ、Whole Body Counter Centerで内部に放射性物質がないか分かり、とても興味深かったです。

平和公園や浦上天主堂に立ち寄り、当時あったことについて知ることができ、有意義な時間となり、長崎原爆病院の視察で、病院はどうなっているのかを知ることができ、有意義な時間となりました。4泊5日という時間を通して、多くのことを経験して学ぶことができました。



金 南希 (キム・ナミ)

居昌赤十字病院 看護チーム 看護師

2日目から研修の開始。長崎大学原爆後障害医療研究所の先生による英語の講義が行われました。長崎の原爆の物理的被害、物理的影響、原爆が人体に及ぼす影響、原爆の急性期、後障害初期/後期、疫

学について体系的な教育が行われました。英語の講義が初めてなので不慣れでしたが、医学用語が占める割合が高く、副教材も大いに役に立ちました。

原爆資料館、平和祈念館、浦上天主堂、恵の丘長崎原爆ホーム、原爆病院などを視察しました。建物は崩れ、形の分からない骨片、歪んだ柱時計（11時02分）、何の罪もなく、理由も分からないまま一瞬にして凄惨な目に遭っても生きていく市民の苦痛に胸がとても痛くなりました。この地球上で二度とこのような悲劇が起きないことを祈ります。



河 徹允（ハ・チャンユン）

慶尚国立大学病院 消化器内科 医師

普段あまりよく知らなかった原爆の被害と被爆者に対する健康管理および疫学研究について、多くのことを知ることができました。今後も継続的な関心と努力を傾けていきたいと思います。

NASHIMの研修を準備して下さった会長と関係者、通訳の方、ガイドして下さったすべての方々と教授に感謝します。



平和公園



長崎大学原爆後障害医療研究所での講義

第2回 韓国医師等受入研修

（令和6年1月21日～25日）



朴 宰萬（パク・ジェマン）

陝川高麗療養病院 診療院長

講義を準備して下さった先生方の情熱と誠意を感じました。

ほんとうにありがとうございました。



柳 慈英 (ユ・ジャヨン)

ソウル赤十字病院 眼科 科長

原爆が人体に及ぼす影響について、多くのことを知ることができた時間でしたし、医学者として、このような研究を進める教授に深い感謝の意を表します。



金 鎮玉 (キム・ジンオク)

釜山報勲病院 救急室 看護科長

日本の長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）主催の韓国赤十字社が支援する研修に招待されたことに感謝します。

1945年8月、広島と長崎に原爆投下後、日本人（住民）69万人のうち23万4,000人が死亡し、強制徴用後、原爆投下後に被爆した後に帰国した韓国人被爆者も生存者3万人、死亡者4万人などの勉強をして研修に来ましたが、長崎原爆資料館で三瀬清一郎さんの被爆体験談を聞き、核兵器が人類破滅の武器であると感じ、現在のロシアとウクライナの戦争がこれ以上進展せずに、早く休戦になればと願っています。

原爆の恐ろしさを痛切に感じ、再び人類にこのような悲劇が起きないことを願っています。

長崎大学の教授から聞いた放射性同位元素の診断治療科の研究と血液内科の研究、原爆後の障害医療の研究など、すべての教育がとても有益で良かったです。



孫 銀貞 (ソン・ウンジョン)

慶熙医療院 看護本部 看護チーム長

戦争、核兵器の威力などは関心外のことでしたし、他の国の話だと思っていましたが、今回の研修を通して、ウクライナ戦争、パレスチナ戦争も他人事ではなく、戦争や核による影響を考える良いきっかけとなりました。

訳も分からないまま、一瞬で凄惨な目に遭い、いつ現れるかもしれない後遺症に対する恐怖を持って生きていく被害者の苦痛に胸が痛くなりました。

長崎原爆資料館にその日の惨状がそのまま残っており、その日の痛みが身をもって感じられる貴重な時間でした。

たまたま運良く参加することになったNASHIMの招待研修。戦争、原子爆弾について門外漢だった私は、多くのことを見聞きして感じるができる良いきっかけになりました。

研修を終えて帰国して日常に戻りますが、平和な一日一日を大切に思い、機会があれば、今回の研修で得た多くのことや知識を同僚や家族に伝えなければなりません。



金 志宣 (キム・ジソン)

大同病院 産業安全保健管理チーム 保健管理者

研修機会を与えていただき、ありがとうございました。

日本を初めて訪問し、日本語にも関心を持つようになり、日本と韓国は痛ましい過去がありますが、今回をきっかけに肯定的で良い関係がうまくつながることを望みます。



李 賢真 (イ・ヒョンジン)

統営赤十字病院 人工透析室 看護師

最初は「NASHIM」という単語に馴染みが薄く、意味が分かりませんでした。

原爆のことは、過去にあった一つの事件として、通り過ぎることもできる過去の出来事だと考えていました。

いまだに原爆、核、その他、戦争の手段として使用できる武器を所有している国があり、いつでも使用できるため、全世界的な影響力に対する警戒心を持たなければならないと思います。

私は、今回の研修がなかったら、原爆の被害者の痛みを感じるができなかっただけでなく、長崎の医療スタッフ、研究員、その他の原爆に関連した方々の苦労も分からなかったと思います。

一人が十人になり、十人が百人、千人……。関心を持って、原爆に対する危険性と世界平和のために声を上げれば、長崎の原爆被害者の悲しみを少しでも減らすことができるのではないかと思います。他の機関の人々に会い、お互いに意見を共有し、一国だけの問題ではなく、韓国であっても安心するのではなく、皆の関心の中で同じことが再び発生しないことを願い、「平和」のために、皆が共に努力しなければならないということを学ぶことができる有益で楽しい研修でした。



李 芋恵 (イ・ウヘ)

尚州赤十字病院 看護チーム 看護師

うまく構成された研修プログラムと親切な通訳の方とガイドの方の助けで、今回の研修はとても満足いく教育でした。

漠然と知っていた長崎の原子爆弾の被害について、もう一度深く考えることができる時間となりました。

特に計画なく行われたと思っていた原爆の投下が、数年にわたって準備され、場所を選定する手続きを経て、最後に天候の変化によって長崎が選ばれたという話を聞いて、驚かすにはられません。長崎を避けたら、また別の場所に原爆が投下されていたと思うと、苦々しい気がしました。原爆は、人間や自然に大変大きな災いのです。

これからの、あってはならないことが引き続き起きている現実が怖いです。戦争は誰のためのものなのか、もう一度振り返ってみなければなりません。



孔 昌培 (ゴン・チャンベ)

韓国原子力医学院 整形外科 科長 / 広報室 室長

日韓の首脳が広島で一緒に会って韓国人の慰霊をするために訪問したように、プログラムに韓国人の被爆者関連の内容も紹介してほしいです。



金 賢娥 (キム・ヒョナ)

韓国原子力医学院 応急室 主任看護師

NASHIMの会長をはじめ、長崎大学で熱情的で、また興味深い講義をしてくださった多くの教授と職員の皆さんにも、本当に感謝しています。

最初は研修日程が長く思いましたが、長崎での時間はあっという間に過ぎてしまい、物足りなさが残るほどです。

原爆の衝撃から80年近くたった今、資料を保存して継続的な研究を通して被爆者を支援し、このような研修を通して核兵器の危険性とそれによる惨状を伝え、過去を忘れずに記憶し、平和を伝えようとする声が今後も続くことを応援しています。良い機会を与えていただき、感謝しています。



曹 有利 (チョ・ユリ)

韓国原子力医学院 非常診療チーム 看護師

NASHIMの担当者、通訳者が本当に熱心に引率、通訳してくださり、感謝しています。

また、被爆者の体験談から始まり、長崎大学のツアー、教授たちの熱い講義が本当に感銘深かったです。さらに、意見交換会の席で韓国の研修団を歓待していただき、感謝しています。

このような良い機会を通して、多くのことを学ぶことができました。招待していただき、ありがとうございました。



金 華榮 (キム・ファヨン)

韓国原子力医学院 生物線量評価チーム 医療技師

プログラムがとても有益で、原爆の歴史および影響について知ることができる有益な時間でした。特に高村昇教授の講義が感銘深かったです。

今後は、韓国人の被爆者に対する内容を扱う時間があればと思います。



森崎会長への表敬訪問



被爆者からの講話を聞く研修生

韓国への専門家派遣事業



NASHIM韓国専門家派遣事業の 意見交換会に参加して

(公財)放射線影響研究所 長崎臨床研究部

副部長 今泉 美彩

2023年9月12日に韓国ソウルで行われたNASHIM専門家派遣事業の意見交換会に参加しました。長崎大学原研国際教授の高村昇先生と助教の松永妃都美先生、長崎県原爆被爆者援護課でNASHIM事務局の谷口裕一さん、通訳の李恵珍さんと私の5人で大韓赤十字社を訪問しました。大韓赤十字社では今回の派遣事業を調整くださった呉尚恩さんと李恵媛さんが出迎えてくださいました。

原爆被爆者・サハリン韓国人支援本部の禹光壕本部長と意見交換を行いました。禹本部長は、今年長崎を訪問されたばかりとのことでした。ヒバクシャ研究は重要であり、時間はかかるかもしれないが原爆やチェルノブイリの教訓が福島の教訓となったように、福島の教訓が世界の教訓となるだろう、核なき世界に向けて科学的知見、情報を共有していくことが重要であると話されました。また在韓被爆者に関しては現在2つの問題があり、1つは被爆二世の研究がないことで現在要望を出しているとのことでした。2つ目は被爆者の心理的問題であり、高齢化も相まって被爆者からは連日様々な心配、問い合わせが多いとのことでした。高村先生は、在韓被爆者のために今後ともご要望を伺いながら交流を進めたいこと、大韓赤十字社をはじめ韓国の方々には是非福島に来ていただき実際の状況を見ていただきたいことなどを話されました。私からは、在韓被爆者ならではの問題についても情報交換を続けたいこと、被爆二世も含め原爆被爆者の知見をこれからも共有していきたい旨をお話ししました。最後に今後もNASHIM事業を通じて引き続き交流、情報交換などを進めていくことを確認しました。大韓赤十字社では、ちょうどモロッコ地震の対応で大変お忙しそうでしたが、大変有意義な意見交換会となりました。

翌9月13日から15日、高村先生と松永先生、私は、ソウルのノボテルアンバサダーソウル東大門で開催された、第17回WHO-REMPAN (Radiation Emergency Medical Preparedness and Assistance Network) 会議に出席しました。WHO-REMPANとは、1986年のチェルノブイリ原発事故を受けてWHOが設立した世界の原子力災害や放射線事故に医療対応する国際ネットワーク機構です。長崎大学と放射線影響研究所はREMPANメンバーとしてWHO協力センターに認定されています。会議では、ウクライナ国立放射線医学研究センターのBazyka所長がその講演の中で、今年5月にNASHIMから寄贈した放射線測定器が大変役立っていると謝意を述べられました。また「福島第一原発事故から12年」のセッションでは、高村先生と長崎大学名誉教授で福島県立医科大学副学長の山下俊一先生が座長を務められ、松永先生が福島の復興支援について、私が福島原発の緊急作業者の甲状腺調査について講演し

ました。このセッションは時間が超過してしまうほど質問が多く、世界における関心の高さが感じられました。また高村先生は、WHO本部のZhanat Carr先生と、NASHIMで翻訳・出版予定のWHO勧告書「放射線および原子力緊急事態のための国家備蓄：政策的助言」の進捗状況について打ち合わせを行いました。さらにウクライナ国立放射線医学研究センターのBazyka所長から、今年5月にNASHIMから寄贈した放射線測定器（サーベイメーター）の活用についてご報告を受け、本NASHIM事業を受けてウクライナにおける緊急被ばく医療体制の構築に向けた日本からのさらなる支援、および来年2月に長崎大学で開催される共同利用・共同研究拠点国際シンポジウムでのBazyka所長のご講演について話をされました。その夜には高村先生主催の日本人夕食会で、福島県立医科大学、広島大学、弘前大学、量子科学技術研究開発機構の先生方と美味しい焼肉で交流を深め、個人的には念願だったカンジャンケジャン（カニの醤油漬け）をいただけたことも良い思い出です。

最後になりましたが、今回のセミナー開催にあたってご尽力頂いた大韓赤十字社の皆様、谷口さん、李さんに感謝申し上げます。



大韓赤十字社との意見交換



禹光壕本部長と高村教授



大韓赤十字社にて

第2回韓国専門家派遣

期間：令和6年2月21日～22日

講師：長崎大学原爆後障害医療研究所 中島 正洋 所長

「原爆被爆者の晩発性健康影響」

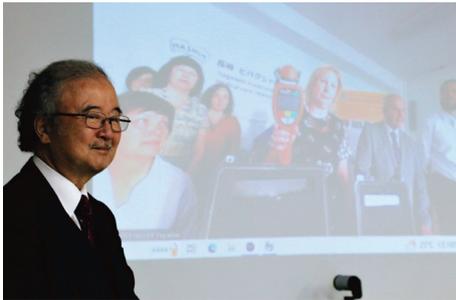
長崎大学原爆後障害医療研究所 工藤 崇 教授

「医療従事者の職業被ばくについて」

会場：慶熙医療院（ソウル）

ウクライナへ放射線測定器を寄贈しました

2022年2月にロシアによるウクライナへの軍事侵攻が勃発し、ウクライナでは原子力施設が攻撃を受けるなど、核の事故が起きる恐れがあったため、協力事業の一環として、ウクライナ国立放射線医学研究センターに放射線測定器を9台寄贈し、2023年5月26日に長崎県医師会館とウクライナ国立放射線医学研究センターをオンラインで繋いでの贈呈式を行いました。



贈呈式（森崎会長による挨拶）



贈呈式（ウクライナ国立放射線医学研究センター）



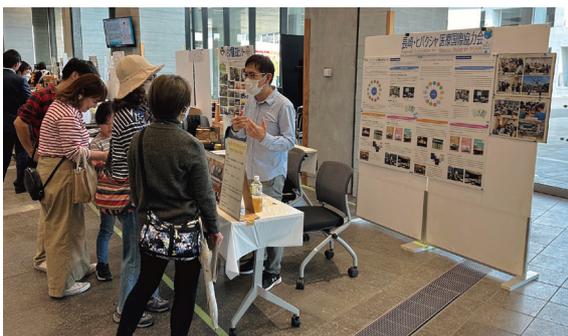
第25回ながさき国際協力・交流フェスティバル

令和5年10月29日に長崎市内で開催された「ながさき国際協力・交流フェスティバル」に出展しました。NASHIMでは、活動状況やヒバクシャ医療についての情報を掲載したパネルの展示、小冊子「漫画で学ぶ長崎原爆」、「機関誌」の配布を行いました。

主催者の(公財)長崎県国際交流協会によりますと、当日は、約2,300名の参加者で賑わったとのことでした。

《概要》

- 日 時：令和5年10月29日（日） 11：00～16：00
- 会 場：長崎県庁1階（長崎市尾上町3-1）
- 主 催：(公財)長崎県国際交流協会、フェスティバル2023盛り上げ隊
- 来場者数：約2,300名 ●出展団体：県内国際協力・交流団体 31団体



新刊図書のご案内

「National stockpiles for radiological and nuclear emergencies: policy advice (放射線および原子力緊急事態のための国家備蓄：政策的提言)」は、放射線緊急事態に備えた医療対策、特に放射線障害の治療に必要となる医薬品の国家備蓄に不可欠な要素を確保するための手順と実践、そしてそのガバナンスと管理について記載されたガイドラインで、2023年1月に世界保健機構（WHO）から英語版で発刊されたものです。

長崎・ヒバクシャ医療国際協力会（NASHIM）では、ロシアによる軍事侵攻によって原子力施設を攻撃されるなど放射線緊急事態への備えが、より重要となっているウクライナで活用してもらうようウクライナ語版を発行しました。

本ガイドラインは、NASHIMまたはWHOのウェブサイトからダウンロードすることができます。

(NASHIM) https://nashim.org/?p=1463&preview=true&_thumbnail_id=1465

(WHO) <https://iris.who.int/handle/10665/365681>

また、WHO協力センターである長崎大学では、このガイドラインの日本語版を発行しており、WHOのウェブサイトからダウンロードすることができます。



(ウクライナ語版)

出前講座を開催しました

ヒバクシャ医療の国際協力や放射線被ばく医療等についての知識などを普及し、被爆者医療にもっと関心を持っていただくため、長崎大学原爆後障害医療研究所の先生方に小中学校を訪れて講義を行っていただく「出前講座」を実施しています。平和と科学、医療に関する国際協力への興味・関心を促すことの出来る楽しい講座となっています。

今年度は多数の申し込みがあり、小学校4校（茂木小学校、南陽小学校、西坂小学校、城山小学校（2回））、中学校2校（丸尾中学校、純心中学校）で全7回実施しました。

三根真理子先生による「原爆直後の救護活動と調査」、「長崎原爆被爆者のこころの調査」では、アニメーションやクイズを交えながら講義を行い、生徒たちは元気よくクイズに答えながら、原爆のことについて学んでいました。



西坂小学校にて（三根先生）



丸尾中学校にて（三根先生）

阿部悠先生による「放射線を浴びたらどうなるの？ 体の中をのぞいてみよう!」、「測ってみよう放射線」では、放射線測定器を使った実験も行い、実際に身の回りのモノや身体などを測ることで、生徒たちは放射線が身近にあることを実感しながら、興味深く学んでいました。



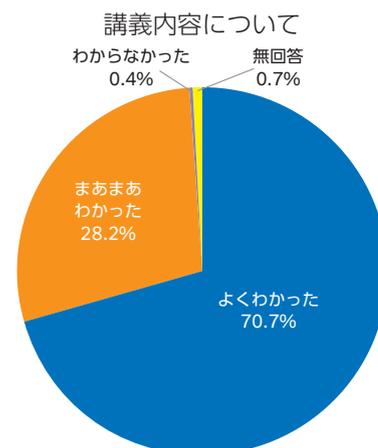
純心中学校にて（阿部先生）



南陽小学校にて（阿部先生）

講師の先生方、参加していただいた生徒の皆さん、ありがとうございました。

日 時	学 校 名	講 義 名	アンケート結果					%	先 生
			よくわ かった	まあまあ わかった	わからな かった	無回答	合 計		
5月10日	茂木小学校	長崎原爆の話・ 原爆直後の救護活動と調査	20	2	0	1	23	95.7	三 根
5月24日	丸尾中学校	長崎原爆の話・ 長崎原爆被爆者のこころの調査	25	8	0	0	33	100.0	三 根
6月20日	城山小学校	放射線を浴びたらどうなるの？ 体の中をのぞいてみよう！	36	27	1	0	64	98.4	阿 部
6月26日	南陽小学校	放射線を浴びたらどうなるの？ 体の中をのぞいてみよう！	29	13	0	0	42	100.0	阿 部
6月29日	純心中学校	放射線を浴びたらどうなるの？ 体の中をのぞいてみよう！ 【実習】測ってみよう放射線	27	10	0	0	37	100.0	阿 部
7月5日	西坂小学校	長崎原爆の話・ 原爆直後の救護活動と調査	7	3	0	0	10	100.0	三 根
10月18日	城山小学校	長崎原爆の話・ 長崎原爆被爆者のこころの調査	44	12	0	1	57	98.2	三 根
		合 計	188	75	1	2	266	98.9	



出前講座終了後に実施したアンケートでは、98.9%の生徒さんたちが「よくわかった」または「まあまあわかった」と回答されました。

生徒達の感想

- 戦争のこと、平和のことを知っているつもりだったが、まだ知らないことが多いと分かった。
- 被爆者はこころの傷を負っており、「あの時私も死ねばよかった」、「なんで私だけ生きのびたのだろう」と苦しい思いをしていることが心に残った。
- グビロが丘にたくさんの意味が込められていることにおどろきました。生き残った生徒で「ここは見晴らしがいいだろう」と骨を埋めて“友其処に眠る”と書いたのは素敵だと思った。
- 今回の学習をいかしてお父さん、お母さんにも教えてあげたい。
- 放射線＝原爆のイメージがあったので、放射線は危ないものと思っていましたが、どこにでもあると知って驚いた。
- 放射線が怖いや危ないということだけではなく、便利なものだと感じた。医療だけでなく工業、農業、化学などの身近なものに使われており、普段食べているような野菜にも使われていると知り、興味が持てた。
- 簡単な言葉にかえたり、分かりやすく、くわしく説明してくれたおかげで放射線のことを知れてよかった。

令和6年度 出前講座

下記の幅広いメニューを小中学生の皆さんにわかりやすく説明いたしますので、興味をお持ちでしたらぜひ事務局までご連絡ください。講座費用は無料です。

講座メニュー		90分 (短縮可)
【実習】測ってみよう放射線		
こわい？ こわくない？ 放射線のふしぎ		
放射線を浴びたらどうなるの？ 体の中をのぞいてみよう！		
長崎原爆の話	原爆直後の救護活動と調査 長崎原爆被爆者のこころの調査	

第15回永井隆平和記念・長崎賞の候補者を募集

NASHIMでは、長崎原子爆弾被爆50周年にあたる平成7年（1995年）に、原子爆弾により自らも重傷を負いながらも被爆者の救護に挺身された永井博士の功績を称え、「永井隆平和記念・長崎賞」を創設しました。

この賞は永井隆博士の崇高な平和希求の精神を引き継ぐ国際社会におけるヒバクシャ医療への貢献者を顕彰するものですが、令和6（2024）年度は第15回を実施する予定です。

5月から候補者の募集を開始する予定ですので、本賞の候補者としてふさわしい方を是非ご推薦ください。詳細についてはホームページでお知らせします。



表彰回数	受賞者氏名	職名（受賞時の職名）
第1回	秋月 辰一郎	聖フランシスコ病院顧問 医師
第2回	サイム・バルムハノフ	放射線腫瘍医学研究所所長（カザフスタン共和国）
第3回	ヨハネス・ヤコブ・ブローゼ	ライデン大学教授（オランダ）
第4回	エヴゲニィ・デミチュック	保健省放射線内分泌研究所甲状腺部門部長（ベラルーシ共和国）
	鎌田 七男	(財) 広島原爆被爆者援護事業団理事長
第5回	日本チェルノブイリ連帯基金	長野県松本市（理事長 鎌田寛祖）
第6回	市丸 道人	長崎大学名誉教授
	横路 謙次郎	広島大学名誉教授
第7回	アナトリィ・ツィーブ	ロシア医学アカデミー・オブニンスク医学放射線研究所長
第8回	クリストフ・ライナー	ドイツ・ビュルツブルグ大学病院院長
第9回	ミコラ・トロンコ	ウクライナ医学アカデミー内分泌代謝研究所所長
第10回	丹羽 太貴	福島県立医科大学特命教授
第11回	ドミトリー・バジーカ	ウクライナ国立放射線医学研究センター所長
第12回	タチアナ・ボグダノワ	ウクライナ国立内分泌代謝研究所内分泌病理研究部門長
第13回	佐々木 康人	湘南鎌倉総合病院附属臨床研究センター・放射線治療研究センター長 放射線影響協会理事長
第14回	前川 和彦	東京大学名誉教授 (医) 明和会 上溝介護老人保健施設 いずみ 施設長